

論文部門総評

論文部門には個人および集団による一九点の応募作品が寄せられた。内容も多岐にわたったので、合計六名の教員に審査を依頼した。一次審査で各審査員が数点ずつ審査し、二次審査では、佳作以上の作品について内容確認と入選以上の評価ができるかを協議した。その結果、入選を一点、佳作を三点それぞれ選定した。そして、審査結果を踏まえ、運営委員会の責任において総評を取りまとめることになった。

入選した柳沢氏の論文は、先行研究をよくおさえ、主題を的確に絞って論を展開している。現地での見聞も活かされ、読み応えある文章にまとめられている。総合的判断から、入選に値すると評価された。ただし、主題の論証と結論までの論述にもう少し工夫があれば、内容が一層充実したものと思われる。

渡辺氏の論文は、民族事象のテーマとして面白い内容で、主題の設定と論述に工夫が見られ、表現力も豊かで読み手を引きつける。文献の調査がよく行なわれ、自己の意見もしっかりしている。しかし、先行研究の記述が欠けるため論文の位置づけができず、意見を立証するための根拠が不足するので、この点は改善が求められよう。

大山氏の論文は、独自の調査を通じて、南米出身者が日本で暮らす際の心の充実感について知ろうとした点が評価できる。今後さらに調査を続けて、内容を充実してもらいたい。そのためには、質問項目の設定に工夫するとともに、有効回答数を増やし、円グラフ表示を使うなどの記述の工夫も必要となろう。

三輪氏の論文は、比較という視点が意欲的で論述にも好感が持てるが、論証が十分ではない。先住民大統領の選出が実現したか否かを論じるには、それぞれの国における選挙動向を分析し、国民の受け取り方を世論調査から読み取るなどの基礎作業が不可欠であろう。

今後とも、多数の学生による力作・意欲作の積極的な応募が期待される。

(人文学会運営委員会)